

氏 名	加藤佳寿美
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第7081号
学位授与の日付	令和6年3月25日
学位授与の要件	社会文化学学研究科社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文の題目	現代日本語形容詞の活用と派生—形容詞ク形の副詞化をめぐって—
論文審査委員	宮崎 和人 片桐 真澄 京 健治 堤 良一

学位論文内容の要旨

日本語の形容詞が副詞的に使用されることがあることはよく知られているが、そうした現象を形容詞の副詞化という品詞の転成の問題としてどのように扱うべきかということについてはまだ統一的な見解はない。そうしたことを考えるには、形容詞の副詞的使用の実態の全体像を把握する必要がある。本研究は、大規模コーパスを使用した網羅的な調査によって現象の全体像を把握したうえで、語彙論や文法論の観点から考察を行うものである。記述の枠組みとしては、『国語学大辞典』(198の「転成の副詞」の項(工藤浩氏担当)における次の三タイプの分類を採用する。

- ①連用修飾の形が独自に意味および機能に変化をきたして、活用や格変化のシステムからはみだしてきたもの
- ②それ自体はさしたる変化を受けないが、他の活用形が失われた結果、孤立して副詞に編入されるもの
- ③連語や句形式のものが一語化して副詞に移行してきたもの

本論文は、次の六つの章からなる。第一章では、本研究の目的を述べ、先行研究を品詞論的な観点からの研究、構文論的な機能と意味の関係に関する研究、語形成の観点からの研究に分けて概観し、総括したうえで本研究の課題と位置付けを述べる。第二章では、形容詞の連用形がどの程度副詞として認知されているのかを探るため国語辞典類と分類語彙表における取り扱いを調査する。第三章では、意味の観点から、形容詞の修飾語用法を規定語用法や述語用法と比較しながらその不規則性を明らかにする。また、修飾語用法の副詞的機能と形容詞の基本的な性質である「評価性」との関連について考察する。第四章では、過去においては形容詞であったものが、連用形以外の活用を失い副詞となったものについて、現代日本語における存在状況や、活用形の消失と意味の変化の関係について記述する。第五章では、形容詞を要素とする連語・句形式について、形容詞と組み合わせる語と形容詞の意味関係や、副詞としての性質について考察する。第六章では、本研究で明らかにしたことをまとめ、今後の課題を述べる。以下、本論にあたる第二章から第五章の考察内容について説明する。以下、第二章以下の各章の論旨を説明する。

第二章では、初めに国語辞典類と『分類語彙表増補改訂版』における形容詞ク形の取り扱いの実態を調査した。その結果、ク形の掲出語は、上記の三つのタイプのいずれかにあてはまり、特に連語形式のものが多くことや、国語辞典では副詞として認定されているものが多いことがわかったが、語によっては形容詞の見出し語が併存するものの、その基準に一貫性は見られなかった。バックハウス(2008)が指摘するように、外国人日本語学習者が十分な情報を国語辞典から得ることは難しいということが明らかになった。

第三章では、述語用法・規定語用法との比較から、形容詞の修飾語用法の意味・用法の特徴について考察した。その結果、規定語用法と述語用法の意味・用法の一致率が約 80 %であるのに対し、修飾語用法の規定語用法や述語用法との一致率は 40 %台にとどまることがわかった。修飾語用法の形容詞を副詞として見た場合の機能は様態の副詞が中心で、動きの属性を客観的に述べるものと話者や主体の主観・評価を表すものとに分かれる。良し悪しという評価性をもつ形容詞は評価的な捉え方をした動き様態の副詞になるものも多く、中立的な形容詞は結果や時間関係の副詞になることがわかった。また、悪い評価性を持つ形容詞には程度の副詞になるものが多いが、強調の効果があるからであると考えられる。純粹程度の副詞になるものには意味の不規則性(述語用法・規定語用法との意味のずれ)が見られるものが多いことがわかった。

第四章では、活用消失によって成立した転成副詞について考察した。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の調査によって得られた、このタイプの転成副詞は 10 語にとどまる。用例数は 5 例(とく)から 5875 例(まったく)と幅があり、最も少ない「とく」は歴史小説などの会話文にしか用いられない。また、意味の点でも、副詞的な機能の点でも、きわだった傾向はない。このタイプの転成副詞には、「まったく」のように、単に連用形以外の活用形が消失したのではなく、連用形の意味が特殊化したものが副詞として自立したものもあることが明らかになった。

第五章では、「名詞+形容詞連用形」という構成の、修飾語として働く「N+ナク」と「N+ク形(ナク以外の形容詞)」について考察した。この構成は、国語辞典類からは 76 語、「分類語彙表」からは 88 語が収集でき、形式的に 5 系列 9 パターンに分類できる。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から収集した「N+ナク」は 416 語であり、N の形態にははだか格・ト格・ニ格が見られた。一方、「N+ク形」は 199 語で、主としてはだか格をとる。N とナク、形容詞とは主述の関係を構成するものが多い。これらは、新たに作り出された副詞一口ご 相当の合成語や臨時的な副詞的表現と考えられるが、それらの副詞的機能の中心は様態の副詞である。「N+ナク」は動き様態と主体状態に関わる副詞が中心で、「N+ク形」は評価的な捉え方をした動き様態が中心であった。N とナク、形容詞が主述関係ではない場合はパターン化が進んでいる。例えば、「N+ナク」では、N がト格のものは、疑問詞などの不定的な意味を含むものも多く、様態・時間・頻度などの副詞となる。N がニ格のものは、時間に関わる意味を持つものがほとんどである。「N+ク形」では、「ところ」を表す N と「量」を表す形容詞が組み合わさって動き様態のうちの程度量につながるものになり、「一日」など相対的に短い時間を表す N がとりたて形をとって「早く」と組み合わせるものは時間関係の副詞となる。

以上の考察から、日本語の形容詞が副詞に転成するパターンは『国語学大辞典』の「転成の副詞」の項目に記述されているように、基本的に三つに分けて考えるのが妥当であることが確認できた。それを転成の「プロセス」として見ると、それぞれのパターンは、終止・連体と連用という統語的な機能の違いが語彙的意味の違いをもたらし、同じ単語としての意味的な一貫性を失って副詞として「分化」していくプロセス、歴史的な「変遷」の中で活用形が欠けていき、何らかの理由で連用形だけが残るというプロセス、名詞と形容詞の組み合わせによって新たな副詞を「創造」するプロセスと解釈できる。ただし、一つめと二つめのプロセスが絡みあっている場合もある。そもそも副詞と形容詞には語彙的意味の共通性があり、これらのプロセスによって、今後も形容詞から数多くの副詞が生まれていくだろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、学校文法でいうところの形容詞の連用形が修飾語として副詞的に用いられるという、日本語に広範囲に見られる現象について、国語辞典類や『分類語彙表増補改訂版』がそうした事実をどのように記述に反映させているか(いないか)を詳細に調査し、大規模コーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から収集した大量の用例を使用してそうした事実の全体像を把握して、終止形や連体形で使用されたときとはどのように意味がずれ、また副詞としてどのように働くか、ということを総合的に考察したもので形容詞における述語・規定語・修飾語の三機能の分布の偏りについては、橋本・青山(1992)や宮島(1993)が計量調査を行い、その要因についても考察しているが、本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で使用されているすべての形容詞ク形の用例を収集し、それらの形容詞の述語・規定語・修飾語の各用法の用例もすべて収集し、語彙・文法情報等を詳細に付したデータベースを構築している。また、意味の分析にあたっては、『分類語彙表増補改訂版』の分類項目情報をデータ化することで、客観性を確保している。また、本研究の問題意識は、日本語教育の立場から国語辞典の不備を指摘したバックハウス(2008)のそれと重なるところがあるが、本研究では、比較にならないほど調査を徹底させ、国語辞典の記述の見直しや日本語教育の現場での活用につながるような情報を多数提示しており、バックハウスの研究を飛躍的に発展させたものという位置づけを与えることもできる。

本論文では、形容詞の副詞化の現象を網羅的に捉えるために、『国語学大辞典』(1980)の「転成の副詞」の項(工藤浩氏担当)に示されている三つのタイプをすべて取り上げ、本論部分の各章(第三章~第五章)で一つずつ考察している。三つのタイプとは、①連用修飾の形が独自に意味および機能に変化をきたして、活用や格変化のシステムからはみだしてきたもの、②それ自体はさしたる変化を受けないが、他の活用形が失われた結果、孤立して副詞に編入されるもの、③連語や句形式のものが一語化して副詞に移行してきたもの、である。

これにより、非常に分かりやすい構成となり、また各章の考察の目的も明確になっている。

本論文の構成については、本研究の目的を述べ、先行研究を品詞論的な観点からの研究、構文論的な機能と意味の関係に関する研究、語形成の観点からの研究に分けて概観し、総括したうえで本研究の課題と位置付けを述べる、序論としての第一章、形容詞の連用形がどの程度副詞として認知されているのかを探るため国語辞典類と分類語彙表における取り扱いを調査する第二章、意味の観点から、形容詞の修飾語用法を規定語用法や述語用法と比較しながらその不規則性を明らかにし、修飾語用法の副詞的機能と形容詞の基本的な性質である「評価性」との関連について考察する第三章、過去においては形容詞であったものが、連用形以外の活用を失い副詞となったものについて、現代日本語における存在状況や、活用形の消失と意味の変化の関係について記述する第四章、名詞と形容詞を構成要素とする連語・句形式について、名詞と形容詞の意味関係や、副詞としての性質について考察する第五章、本研究で明らかにしたことをまとめ、今後の課題を述べる、結論としての第六章からなる。

副詞としては周辺のものになるが、名詞と形容詞を構成要素とする副詞的表現を扱う第五章が最も分量が多く、大変丁寧な記述がなされているのは、このタイプは生産性やパターン化の特徴をもつことから、転成副詞の中でも重要な位置をしめているという認識による。それに対して、活用形の消失による転成副詞を考察した第四章は、該当する語の数が少なく、個別の語誌の研究になってくることから、章としてまとめることがやや難しかったようであるが、このタイプを含めて、形容詞の副詞化の全体像を視野に収めて記述し

たことは、画期的である。

審査会では、研究プロジェクトが行うような規模の用例収集とデータベース化を一人で行い、事実に忠実な記述を大変丁寧に行っていることが、まず高く評価された。そのほか、時間をかけて各章の内容を十分に練り直しており、やや複雑になった部分もあるが、全体的に非常に完成度が高いこと(特に、歴史的な部分が予備論文からかなり強化されている)、序論がしつかりしていることが論文全体の価値を高めていること、先行研究の取り上げ方も丁寧であり、それらと本研究との関係も明確であること、各章のそれぞれの調査の目標や方法が明確で、調査データから何が分かるかも適切に説明されていること、意味を扱うのは非常に難しいが、分類語彙表を駆使して、試行錯誤を繰り返しながら、最終的に一定の結論を導き出せていること、などが評価された。

一方、問題点としては、題目にある「派生」の概念がはっきりしないこと、言語学的な観占い、や他言語への言及がほしいこと、他の活用形が消えた理由を追求してほしいこと(第四章)、綿密に網羅的に記述されているが、どうしてということに十分に踏み込んでいないこと、今後の課題をもう少し詳しく書いてほしいこと、などの指摘があったが、いずれも致命的なものではない。

本論文の結論は一言でいえるようなものではないが、それは研究対象が個別の語彙や文法形式ではないからである。本論文の対象は、形容詞が副詞化する「現象」一般であって、そこには結果を予測できるようなルールのようなものは存在しない。ただ、タイプがあるのみである。そのタイプを網羅的・体系的に記述できているかが本論文の評価ポイントとなる。そして、そうした観点から本論文を評価するなら、はかりしれない時間と手間をかけた調査と分析にもとづく本論文の記述の範囲と精度は従来、類を見ないものであり、形容詞が副詞化する現象の全体像が十分に整理されてこの論文の中にあるといえる。本研究の方法は、そのまま形容動詞の副詞化や名詞の副詞化にも応用できるだろう。今回は副詞化の範囲を修飾語として働く形容詞のク形に限定したので、陳述副詞が外れたが、これはまず取り組むべき次の課題である。

いくつか問題点も指摘されたが、学術的価値が十分に高いことから、審査委員会では全員一致で本論文は学位授与に十分に値するという結論に達した。